



シノドス実施への道

2027-2028 年 各アセンブリーへ向けて

準備のためのステージ、基準、ツール

(原文：イタリア語)

振り返る

解釈する

方向づける

祝う

教会の人びとを集め、これまで起こったことをともに振り返り、主が成し遂げられた驚くべきみ業を分かち合うことは、福音書で語られる、宣教から戻る体験に根ざした一つの実践です。つまり、2人1組で遣わされた後、「72人は喜びながら帰って来て」（ルカ 10・17）、主が彼らを通して成し遂げたことを語り合ったのです。

その後、使徒時代の教会もこの実践を取り入れました。『使徒言行録』には次のように記されています。「わたしたちがエルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。翌日、パウロはわたしたちを連れてヤコブを訪ねたが、そこには長老が皆集まっていた。パウロは挨拶を済ませてから、自分の奉仕を通して神が異邦人の間で行われたことを、詳しく説明した」（使徒言行録 21・17-19。使徒言行録 14・27、15・4, 12 参照）。

今後数年にわたるシノドスの歩みは、これらの物語から着想を得て、神の民を集め、神がわたしたちのうちに今も成し遂げ続けるみ業をともに観想し、その実りを分かち合い、感謝をささげる機会となるでしょう。こうして集う各教会は、たまものの交換を体験することができるようになり、新約聖書であかしされ（ローマ 15・26-27）、公会議で新たにされ（『教会憲章』 13, 23 項、『教会の宣教活動に関する教令』 38 項、『司祭の役務と生活に関する教令』 6, 7, 10 項参照）、2021-2024 年シノドスの『最終文書』（とくに 120-123 項参照）で明確に再確認された、もう一つの根本的な霊的ダイナミズムに取り組むことになるのです。

その準備にこの文書が向けられる、2027-2028 年の各アセンブリーは、シノドスの実施ステージの中に位置づけられています。これは、使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ』で概説されているプロセスの第 3 の段階であり、神の民に意見聴取し、耳を傾け（2021-2023 年）、2023 年 10 月と 2024 年 10 月の、世界代表司教会議第 16 回通常総会の 2 回の会期で頂点を迎えた祝祭ステージに続くものです。『最終文書』の発表をもって、教皇フランシスコはこの新しいステージを開き、その後、教皇レオ十四世によって再確認され、推進されています。『シノドス実施ステージの旅程』（2025 年 6 月 29 日）は、この旅路の地平と歩み方をさらに明示し、基準と最初の方角性を提示しています。

ここで提示される示唆は、各地方教会やさまざまな領域の教会共同体の関与を特定することで、すでに進行中のプロセスをより具体的な形に整理する助けとなるよう意図されています。実施ステージは、各共同体の日常生活に追加の仕事を導入するものではなく、むしろその生活を内側から方向づけ、刷新します。各共同体がより多くのシノドス的な実践や教会生活の形態を試み、その実りを評価し、交わりを育て宣教を支える教会間の交流のダイナミズムの中で、それらを分かち合うよう招いています。こうした地平の中で、『旅程』の中で告知されている一連のアセンブリーの意味がより明確になります。つまり、それらは孤立した行事ではなく、2028 年の「教会総会（エクレジアル・アセンブリー）」へと至る、識別、回心、そして成長という、より広範な歩みの中の、重要な節目なのです。

今後数年にわたって計画されている各アセンブリーは、シノドスの実施において決定的な一歩となります。『旅程』でもすでに強調されているように、これは単に形式的にステージを追加することで

も、2021-2024年のシノドスの類似したステージで既に経験されたことを繰り返すことでもなく、各教会が得た体験を、共有できる知恵へと変容させる手助けをすることです。ここで問われているのは、単に歩みを継続することではなく、その成熟なのです。

このねらいは、一見単純でありながら、同時に高い要求を伴うものです。つまり、聖霊によって育てられたものを認識し、旅路に依然として立ちほだかる困難を理解し、リアリズムと信頼をもって、今後踏み出すべき一歩を見定めることです。この意味で、各アセンブリーは単に技術的なことを振り返る場ではなく、全教会で共有する歩みの中で、識別、分担された共同責任、感謝表明の機会なのです。

この歩みの一致を保つため、すべてのレベルでの働きを導く、共通の問いが提示されていますが、各ステージの文脈に合わせて、その問いを具体化する作業は各ステージにゆだねられています。

2021_2024年シノドス総会後に歩んできた道のりを踏まえ、
その成果を他の諸教会と教皇へのたまものとして提供することを見据えて
皆さんの共同体の中で、
宣教するシノドス流の教会はどのような具体的な形を現し、
シノダリティはどういった新たな道筋を拓きつつあるのでしょうか。

この問いは、祈りの心をもって、『最終文書』の実施に関する体験、つまり、始められた取り組み、新たな出発、進行中の変革、直面した困難についても、あらためて振り返るよう促すものです。同時にこの問いは、諸教会の間で物語を語り、コミュニケーションをとるプロセスを活性化させ、彼らが自らのうちに閉じこもることなく、これまで生きてきたことを、より広範な交わりの地平の中に位置づけられるよう助けるのです。

目的と展望

評価（アセスメント）のためのアセンブリーは、シノダリティにおいて共同体が成長する旅路の、それぞれの糸を一つにまとめ上げる霊的プロセスであり、祝祭のときです。シノダリティとは、交わりに根ざし、宣教に向けられた、教会生活の不可欠な次元です。このため、評価プロセスの目的は、世における教会の使命への忠実さと関係性において、神の民全体が成長することであり、とりわけ女性、若者、貧しい人、そしてわたしたちの共同体の周縁に生きる人々の参加に注意を払います。

各アセンブリーおよびその準備において重要なのは、シノドスの意見聴取のステージを繰り返すことではなく、実際に体験したことから学び、その成果と困難を認識し、注意深い識別のもとで優先順位やプロセスを再調整し、教会の各主体の間の共同責任を強化し、教会間における真のたまものの交換をはぐくむことです。こうした状況において、神のみことばの光のうちに、聖霊の声に注意深く耳を傾け続けることが、依然として決定的に重要です。実際、各アセンブリーは社会学的な意見聴取でもなければ、活発に議論する場でもありません。祈り、耳を傾け、分かち合いをすることの「質」

は、作成される資料の量よりも重要であり、その資料については簡潔かつ的を射たものであることが期待されます。

とりわけ、各アセンブリーはより広範な教会の歩みの中に位置づけられており、それには十分な準備期間、各共同体や参与機関による真の関与、そしてその成果の共有と伝達における細心の配慮が求められます。各アセンブリーは、その道のりのすべてを網羅するものではありませんが、まとめと新たな推進力の源となるときを表現します。その中で認識され、分かち合われたことは、その後の歩みを導き、各教会間の対話をはぐくみ、シノドス的で宣教的な成長のプロセスの継続を支えることを目指しています。

責任と構成

このプロセスにおいて、各教区／各エパルキア・アセンブリーについては当該教区／エパルキアの司教が、各国または各地域アセンブリーについては司教協議会会長が、大陸レベルについてはアセンブリーのための大陸別組織の責任者が、その責任を担います。この責任は、『最終文書』69 項および 92 項で明記されている精神に基づき、参与機関やシノドス・チームと協力して遂行されるべきものです。この機関・チームに、作業の計画と調整はゆだねられます。この観点から、シノドス・チームは単なる運営組織ではなく、耳を傾け共同責任を果たす体験が成熟してきた主体であり、これを維持し、さらに発展させていかなければなりません。したがって、これがまだ実施されていないところでは、教区、国、大陸のシノドス・チームを再活性化し、その構成について、シノドス事務局と連絡をとっていくことが不可欠です¹。

各アセンブリーの構成は、その目的に沿ったものでなければなりません。それは単に、ある教区や、ある国・地域の教会を表わしているかどうかにとどまらず、現在進行中のプロセスに精通し、それらを神学的・司牧的に解釈できる人びとの出席を確保することが問題となるのです。参加者の選定にあたっては、男女間のバランスや世代間バランス、文化的・教會的な多様性——司祭、助祭、男女奉獻生活者、各種団体・運動体・新しい共同体のメンバー、さらに既成組織に属さない信者を含む——、そして弱くされ周縁化された状況で暮らす人びとの参加に十分な配慮を払うべきです。とりわけ、小教区の司祭の参加には細心の注意を払う必要があります。また、教会組織に直接結びつかない声も評価し、適当な場合には、他の諸教会やキリスト教共同体、諸宗教の代表者の参加を認めることも重要です。参加のレベルや形態は、文化的背景、能力、経験に応じてばらつくでしょうが、**参加者たちが 2028 年以降もこのプロセスを進んで支え、その継続性を確保するよう支援してくれることは必須です。**

実際の会議への参加人数は必然的に制限されるため、できるだけ多くの信徒が、このプロセスに真に参画していると感じられるような方策も講じられるべきです。そのため、オンラインでの事前準備の機会を設けたり、必要に応じて通訳付きのストーリーミング配信などを通じて、一部の会合へリモート参加できるようにする場合があります。このプロセス中に作成された資料は、少なくともオンライ

¹ 教区、国、大陸のシノドス・チームのための登録フォームは、以下のリンクから利用可能。
https://synod2024db.com/2025_synodal-teams-registration/

ン上で公開される予定です。同時に、準備段階であっても、実際に顔を合わせる会議は、互いに耳を傾け合い、共同識別するためのかけがえのない場であるため、その重要性を過小評価してはなりません。

日程表とツール

すでに『旅程』で示されている、各アセンブリーの日程表は以下のとおりです。

- 2027 年上半期：教区／エパルキアにおける評価アセンブリー
- 2027 年下半期：各国司教協議会および司教協議会連盟、東方諸教会の位階的組織、その他の教会の連合体における評価アセンブリー
- 2028 年第 1 四半期：大陸別評価アセンブリー
- 2028 年 10 月：バチカンでの「教会総会（エクレジアル・アセンブリー）」

具体的な実施方法は、さまざまな状況における文化的、社会的、政治的な条件に合わせて、慎重かつ柔軟に適応させていく必要があります。方法論的な観点から、「霊における会話」は依然として、もっとも重要な参照方法であり、また評価プロセスの各ステージにおける具体的なニーズに応じて必要な調整を行うことも可能とします。

この旅路において参照すべき文書は、何よりもまず、世界代表司教会議第 16 回通常総会の『最終文書』および『シノドス実施ステージの旅程』です。また、第 1 会期後に設置された研究部会の「最終報告書」が現在順次公表されており、入手可能になり次第、www.synod.va の専用ページにまとめられていることもご留意ください。これらの報告書は、教会生活に関連する特定の課題についてより深く考察するための材料を提供するものであり、この旅路の各ステージの中で可能な限り受け取られ、組み込まれるべきものです。それは、単に適用すべき内容としてではなく、現在進行中の識別を照らし、それをより広い地平の中に位置づける助けとなる指針として、です。

準備を適切に支援するため、さらなる作業資料を提供するとともに、目的や内容を明確にし、責任者の皆さんがこのプロセスを円滑に進められるよう支援することを目的としたオンライン説明会を開催します。詳細については、追って案内します。これらのツールは、多様な状況を尊重しつつ、教会としての旅路の一致を保ちながら、十分な情報に基づいた参加と、一貫したアセンブリー運営を促進することを目的としています。

この全体的枠組みを踏まえ、この旅路の各ステージの実施に、より具体的に同伴できるよう、各ステージに関する指針を以下に示します。ただし、**それぞれの状況の特性に応じて、慎重かつ自由裁量をもってこれらを適応させる必要がある点**には留意してください。関係するすべての皆さんが、自らが貢献を求められているステージに、あるいは具体的な責任を担っているステージに、とくに注意を払ってください。同時に、全体像を読み解くことによって、このプロセスの一体性と広範さをより深く理解でき、より意識的かつ調和のとれた参加が促進されるでしょう。

旅路の各ステージ

振り返る

地方教会ステージ（教区／エパルキア）

解釈する

（国または地域）司教協議会ステージ

方向づける

各大陸（または大陸内の地域）ステージ

祝う

教会全体の教会総会（エクレジアル・アセンブリー）



シノドス実施への道

地方教会ステージ

(教区／エパルキア)

—2027 年上半期—

振り返る
解釈する
方向づける
祝う

振り返る

玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い
また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた（黙示録 21・5）

各地方教会（教区／エパルキア）におけるステージは、2027 年上半期に、振り返りと識別の時として行われます。これは単に再構築する作業ではなく、教会としての行為です。すなわち、これまで起きてきたことを収集し、認め、その意味を把握し、そして、今まさに浮かび上がりつつあるものを明らかにしていくことです。この文脈において、記憶とは過去を振り返ることではなく、歴史や共同体の生活における聖霊のわざの光に照らして、現在を読み解くことを意味します。このステージにおける働きの地平は、主に物語形式です。

このステージにおいて、地方教会はまず、これまで始められてきたさまざまな取り組みを集約し、それらを相互に関連づけるよう求められています。具体的には、宣教する存在としての新たな形態、共同責任の実践、耳を傾ける道筋、意思決定プロセスの変革、そして組織改革などです。それは、『最終文書』で強調された三つの教会の回心——すなわち、関係性の回心、意思決定プロセスの回心、諸教会相互および教会と地域社会との絆の回心——を念頭に置きつつ、その経緯、変遷、得られた教訓を語り、明らかにしていくことです。この視点に立ち、組織改革というレベルを無視することなく、回心の個人的側面と共同体的側面を両立させることが重要となるでしょう。

このステージは、密接に関連し、互いに補完し合う二つの場面を通じて展開されます。

- 最初の場面は、アセンブリーに先立って行われる**体験の霊的な読み直し**であり、これにより、さまざまな領域で体験されたことを収集し、整理し、焦点を当てることが可能となります。この作業の成果として、**物語形式の報告書**が作成されます。
- 第2の場面は**アセンブリー自体**であり、そこではこの最初の検討内容が体系的な形で受け取られ、共有され、解釈されます。つまり、互いに耳を傾け、共同識別することを通じて、この旅路に対するより深い理解が熟成し、守り、受け継いでいくべき本質的要素が明らかになるのは、まさにここにおいてです。

これら双方の場面は、他の地方教会との交流に向けてと同様、共同体内部の成長にも向けて方向づけられています。つまり、成熟した成果が認識され、より広範な教会の旅路へ貢献するものとして提供されるのです。したがってアセンブリーは、評価するプロセスの最重要の成果を他の諸教会と分かち合うために、諸教会に宛てた書簡を執筆する機会ともなるでしょう。

A. 物語形式の報告書

このステージの出発点は、これまで歩んできた道のりを、注意深く、かつ体系立てて再検討することにあります。その出発点となるのは、教区やエパルキアの具体的な状況の中で明確に示された、プロセス全体を導く中心的問いです。

「2021–2024 年シノドス」の終了後に歩んできた旅路に照らし、
また、その成果を他の諸教会や教皇への贈り物として提供することに鑑み、

宣皆さんの共同体の中で、
宣教するシノドス流の教会はどのような具体的な形を現し、
シノダリティはどういった新たな道筋を拓きつつあるのでしょうか。

この問いを踏まえ、シノドスの『最終文書』がどのように実施されてきたか、どのようなプロセスが開始されたか、どのような変革が進行中か、どのような困難が生じているか、そしてどのような展望が見えてきているかを検証することが求められています。

この取り組みを支援し、より具体的なものにするために、『旅程』では、受け入れと展開の段階を把握するために、各地方教会が自らに問いかけるべき種々の領域を示唆しています。

- シノドスの霊性（『最終報告』43-46 項参照）、およびシノドス的な視点に立った典礼（同、27 項参照）の推進
- 奉仕職とカリスマの育成。叙階の秘跡を必要としない指導的役割や、その他教会における責任への信徒の参画（同、60, 75-77 項参照）
- 教会的識別の実践（同、81-86 項参照）、シノドス流の仕方における意思決定プロセス（同、93-94 項参照）、およびシノドス流の仕方による参与機関の運営（同、103-106 項参照）
- 透明性、説明責任、評価実践の発展（同、95-102 項参照）
- 小教区や地域共同体の宣教的刷新（同、117-119 項参照）
- 近隣教区内、地域内、さらに各国にまたがる絆（同、124 項参照）
- エキュメズム関係におけるシノドス流の仕方（同、137-138 項参照）
- 諸宗教関係におけるシノドス流の仕方（同、123 項参照）
- 社会における組織的活動（教育、文化、人間の尊厳の促進、もてなし、医療など。同、118 項参照）や、平和、正義、わたしたちの共通の家のケアの促進（同、47-48、121 項参照）における、シノドス流の仕方
- シノダリティにおける養成活動（同、143-151 項参照）、およびキリスト教入信の道筋のシノドス的性格（同、142 項参照）
- など。

このリストは網羅的なものではありませんが、今回の体験に関連する諸側面が見落とされない一助として用意されたものです。各地方教会は、それぞれの状況の中で、もっとも重要な領域にとくに注意を払うよう求められており、必ずしもそれらすべてを取り上げる義務はありません。いずれにせよ、この再検討において、キリスト教共同体の内側の生活にだけ焦点を当てるのではなく、宣教的視点につねに開かれていることが不可欠です。つまり、人間生活、社会生活の具体的状況の中で、教会がよりよく福音を告げ知らせることができるようになるために、シノドスを実施する体験はこれまでどのような形で貢献してきたか、また今後どのように貢献しうるのか、ということです。

このプロセスを円滑に進めるため、今後数カ月以内に、物語形式の報告書の作成要領を送付します。なお、同文書には、共有する価値があると判断された具体的体験について、短文（各 1 ページ程度）を添付してもよいことを、あらかじめ付記しておきます。これには、期待された結果が得られなかった事例も含まれますが、そうした事例もまた、貴重な学びの要素を提供しうるものです。

報告書の起草を調整する責任は、通常、シノドス・チームにゆだねられます。同チームは、教会生活のさまざまな領域に関わる個人・団体と協力して作業を進め、**最終承認を行う司教の最終的責任のもとにあります**。司教が変更や修正の必要性を認めた場合は、その所見の理由を明記した上で、原稿をチームに差し戻します。この作業はアセンブリー前に完了させ、報告書は事前に十分な余裕をもって参加者に配布されなければなりません。

B. アセンブリー：旅路全体の振り返りと他の諸教会宛ての書簡

アセンブリーは、分析的な振り返りが受け取られ、共有され、そして教区／エパルキアとしての教会全体の体験に照らして解釈される時間によって構成されます。**物語形式の報告書は、アセンブリーの出発点の役割を果たします**。つまり、互いに耳を傾け合い、意見を交換し、ともに祈ることを通じて、歩んできた道のりに対して、より統合された見解が成熟していくのです。「霊における会話」は、適切に応用されつつ、依然として推奨される方法論的な参照点です。教會的識別とは、さまざまな立場の間の妥協の産物ではなく、ともに霊に耳を傾けることによる実りだと理解しています。

このアセンブリーの目的は、さらなるまとめ文書を作成することではなく、世界中の他の地方教会に向けて、簡潔かつ伝わりやすい形で、シノドスの実施過程で得られた主な成果を分かち合うための**短い書簡を起草すること**です。つまり、何が理解されたか、何が有望と見なされているか、何が未解決のままであるか、といった点です。

この限られた長さの手紙には、単なる報告以上の価値があります。これは、教会間のたまものの交換に参加することを可能にし、自らの体験を分かち合いながら、他者の体験にも心を開く、教會的交わりの行為なのです。手紙の作成要領もまた、送付します。

アセンブリーの終了後、物語形式の報告書および書簡は、その後の識別の段階への貢献として、国（または地域）のシノドス・チームに送付され、**2027年6月30日までにシノドス事務局と共有**されます。

まとめ

「地方教会ステージ」においては、互いに異なる、補完し合う二つの文書が作成されます。**アセンブリーに先立っては**、物語形式の報告書が作成され、検討された各領域における体験について、霊的、神学的、司牧的観点から再解釈した内容が、体系的にまとめられます。**アセンブリー期間中は**、他の諸教会宛ての書簡が作成され、この歩みの全体的意義と、得られた主な成果が簡潔にまとめられます。

この二つの側面からなる取り組み——まず教区／エパルキアの教会共同体の内なる生活に向けられ、そして次に外へと向かうもの——において、司教の最終的責任のもと、このステージの質が試されます。それは、これまで何が起こったかをより深く理解するだけでなく、霊が何を生み出させようとしているのかをともに認め、それを教会全体の歩みのためのたまものとして分かち合うことでもあるのです。



シノドス実施への道

司教協議会所属の各地方教会ステージ

(国または地域)

—2027 年下半期—

振り返る
解釈する
方向づける
祝う

解釈する

「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、……
さあ、見たことを、今あることを、今後起ころうとしていることを書き留めよ。
あなたは、わたしの右の手に七つの星と、七つの金の燭台とを見たが、
それらの秘められた意味はこうだ。
七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である」(黙示録 1・17-20)。

このプロセスにおいて、司教協議会を構成する各地方教会のステージは、知恵と神学に基づく解釈を行う時期です。各教区／エパルキアによって行われた振り返りと語りの作業を経て、今ここで、さらなる一歩が求められています。つまり、各教区／エパルキアによって分かち合われた成果を受け取り、それらを互いに関連づけ、より広範な教会的な意味合いが浮かび上がるようにすることです。これは、各地の体験が、その具体性を失うことなしにより広い展望の中に位置づけられる時であり、共通するダイナミズム、一致点や対立点、そして特定の地域における教会全体の生活に関わる展望を特定することができるようになるのです。

総じて、このステージの主な担い手は、同じ司教協議会に属する各教会です。今回のプロセスのこのステージにおいて、それらが識別と策定作業における恒常的な参照点となります。しかしながらこのステージはまた、状況に応じ、より狭い範囲の教会領域（教会管区など）において、また、文化的、社会的、司牧上の文脈がとくに同質的な国々をまとめたより広い領域（たとえば、アフリカや欧州の一部地域など）において、実施されることもあります。こうした観点から、CEAMA（アマゾン教会協議会）に集う諸教会も同様に、彼ら独自の特定の道筋を策定するよう招かれています。その成果はそののち、ラテンアメリカの諸教会による、さらに広範な策定作業へと導入されます。司教協議会に所属していない教区／エパルキアは、文化的、社会的、司牧的近接性に基づき、このステージを実施する上でとくに実り多いと思われる諸教会の連合体を定めるよう招かれています。

司教協議会会長の継続した責任のもと、シノドス・チームは、国または地域レベルの責任ある機関、委員会、担当者らと連携しながら、このステージの調整を行うよう求められます。また、適切な仕方で、専門家や各教区／エパルキアのシノドス・チーム代表者を関与させる必要があります。

このステージもまた、互いに補完し合う二つの異なる段階で構成されています。第1の段階では、特定の側面について重点的に振り返りを行い、テーマ別のワークシートの作成などを通じて、**神学的・司牧的報告書の草案作成**へとつなげていきます。第2の段階はアセンブリーを中心として、そこでは、これまで歩んできた旅路について共有できる解釈を策定し、その成果を、他の諸教会宛ての**書簡**を通じて伝達することが求められます。

A. 神学的・司牧的報告書

このステージの最初のステップは、教会生活のさまざまな領域で体験され、着手されてきたことを整理し、焦点を当てることを可能にする、**テーマ別のワークシートを作成**することです。この作業

は、以下のすべてのテーマ別ワークシートを作成することによって、各教区／エパルキアからの提出物（物語形式の報告書と書簡）から得られた内容を収集・再整理するものです。

1. シノドスの霊性（『最終報告』43-46 項参照）、およびシノドス的な視点に立った典礼（同、27 項参照）の推進
2. 奉仕職とカリスマの育成。叙階の秘跡を必要としない指導的役割や、その他教会における責任への信徒の参画（同、60, 75-77 項参照）
3. 教会的識別の実践（同、81-86 項参照）、シノドス流の仕方における意思決定プロセス（同、93-94 項参照）、およびシノドス流の仕方による参与機関の運営（同、103-106 項参照）
4. 透明性、説明責任、評価実践の発展（同、95-102 項参照）
5. 小教区や地域共同体の宣教的刷新（同、117-119 項参照）
6. 近隣教区内、地域内、さらに各国にまたがる絆（同、124 項参照）
7. エキュメニズム関係におけるシノドス流の仕方（同、137-138 項参照）
8. 諸宗教関係におけるシノドス流の仕方（同、123 項参照）
9. 社会における組織的活動（教育、文化、人間の尊厳の促進、もてなし、医療など。同、118 項参照）や、平和、正義、わたしたちの共通の家のケアの促進（同、47-48、121 項参照）における、シノドス流の仕方
10. シノダリティにおける養成活動（同、143-151 項参照）、およびキリスト教入信の道筋のシノドス的性格（同、142 項参照）

他のワークシートでは、諸教会の連合体の動きにおいて、より明確に表れている特定の諸課題について、あらためて検討するよう求めています。

11. 神学校における、シノダリティに関する養成（同、142 項参照）
12. 神学部や研究機関における、シノダリティに関する方法と養成（同、67 項参照）
13. 各国司教協議会とその機関のシノドス流の方法（同、125 項参照）
14. 地方教会のシノドス的な動きにおける、奉獻生活者と信徒団体の参与（同、65, 118 項参照）

これらのワークシート（書式は追って提供されます）の作成を通じて、これまでに達成された成果だけでなく、何よりもそれぞれの領域に共通して見られる動向、浮かび上がってきている指針、そしてさらなる考察を必要とする問いを明らかにすることを目的としています。この前の段階と比べ、今回求められる作業は、その体験に対する、より明確な神学的・司牧的解釈を伴うものです。テーマ別ワークシートの作成が完了した後、シノドス・チームによる調整のもと、数ページの序文が起草され、全体的な神学的・司牧的解釈が提供されます。

この序文とテーマ別ワークシートが一体となって、神学的・司牧的報告書を構成します。それは、起こってきた主要な動向、さまざまな領域に共通して見られる横断的問い、そして今後の旅路に向けて開かれている展望について述べています。本報告書は、地方レベルで成熟した教会としての気づきを代弁する、貴重な資料です。つまり、各地方教会から受け取ったものを提示し、それら教会が自らの歩みをより広い共有された地平の中に位置づけるよう促し、国（または地域）評価アセンブリーの作業のための出発点となるのです。

さらに、このステージの間、各シノドス・チームは、各教区／エパルキアが作成した他の諸教会宛ての書簡の、最適な公表および普及の仕方について検討します。これは、これまで歩んできた道のりと、その道のりを活性化してきた多様な声の、具体的しるしとなるものです。

B. アセンブリー：この旅路と他の諸教会への書簡の全体的な振り返り

国（または地域）評価アセンブリーは、収集された各種資料（神学的・司牧的報告書、物語形式の報告書、および各教区／エパルキア作成の諸教会宛ての書簡）を受け取り、それらを体系的に再検討するために招集されます。その目的は、まとめを提示することではなく、現在および将来にとって最重要と思われる事柄を示すことが可能な、共有しうるこの旅路についての解釈を導き出すことにあります。

具体的には、このアセンブリーでは、世界各地の地方教会および諸教会の連合体宛ての書簡を起草することが求められます。その書簡の中で、今回の旅路の主な成果が、簡潔かつ分かりやすい形で表現されるでしょう。つまり、学んだこと、有望であると認められたこと、そして共通の道のりへの貢献として提示できる洞察などです。地方のステージにおいてと同様、コミュニケーションへの配慮はこのプロセスの不可欠な要素です。つまり、諸教会がともに成長するのは、まさにこの交流を通してなのです。

この神学的・司牧的報告書および書簡は、このプロセスの次のステージへの提出物として、大陸別シノドスチームに提供されるとともに、**2027年12月31日までにシノドス事務局にも共有されること**となります。

まとめ

（国または地域）司教協議会に属する各地方教会ステージの働きは、歩んできた旅路について、神学的・司牧的解釈を提供するためのものです。それによって、さまざまな体験は相互に関連づけられ、それらは互いの関係性のうちに、また神のことばと教会の教えの光のうちに照らされるのです。その宣教の働きの中で、神の民全体へより広く伝えることを目指しています。

その作業は、以下の文書の起草という形で具体化されます。つまり、アセンブリー前は、指定されたテーマに関する一連のワークシートと、全体的な解釈を示す序文からなる神学的・司牧的報告書、アセンブリー中は、この歩みの主な成果を共有する、世界中の他の諸教会に宛てた書簡、です。

これらの資料に加え、各教区／エパルキアで作成された物語形式の報告書と書簡が整理されてまとめられます。



シノドス実施への道

各大陸の地方教会ステージ

(または大陸内の地域)

—2028 年第 1 四半期—

振り返る
解釈する
方向づける
祝う

方向づける

更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが
夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た
そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。
「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人とともに住み
人は神の民となる。神は自ら人とともにいて、その神となる」(黙示録 21・2-3)

シノドス実施のプロセスにおいて、大陸ステージは、**新たな展望を切り開くことのできる方向づけの段階**として位置づけられます。各教区／エパルキアによって行われた歩みの再検討、ならびに（国または地域）司教協議会レベルで熟考された解釈を経て、それぞれの大陸の教会が、強調された種々の領域において、聖霊が彼らに歩むよう招いている道程を、ともに認め合う場が開かれます。このステージでは、体験の中で霊がどのように働いているかにより深く耳を澄ませ、神のことばと教会の聖伝に照らして、現在進行中のダイナミズムを識別することが求められます。それによって、現代世界に息づくことのできる、宣教するシノドス流の教会へと向かう旅路のための基準や指針が立ち現れてくるのです。

各大陸（または大陸内の地域）は、単なる地理的な区分にとどまらず、共通のダイナミズム、つまり、移住プロセス、文化変容、政治的緊張、信仰生活の様式変化によって特徴づけられる、文化、社会、宗教的な文脈を表しています。大陸とは、単なる中間的統合体ではなく、各国境を越える、共有された対応が求められる課題を、諸教会がともに認識しうる文脈なのです。

このステージの作業は、ある司教協議会（国または地域）所属の各地方教会ステージで作成された資料の収集・分析に加え、特定のテーマに関するワークシート（とりわけ、大陸別の諸教会の連合体が担うシノドス的機能に関する）の作成から成ります。そののち、より厳密に識別指向の時となり、「**将来展望報告書**」の作成を目指します。それはつまり、これまでの旅路を包括的に再検討し、浮き彫りになってきた優先事項や共有された方向性を特定するものです。主な成果を共有すべき他大陸の教会との連携は、極めて重要となります。その結果は、**2028年4月30日までにシノドス事務局へ提出**されることとなります。

このステージの特定の側面や、**作業を進めるための具体的方法**については、各大陸の代表者との対話を通じてさらに展開させ、より詳細な指針や、その都度必要となる補助資料を策定するよう目指します。

この同じ枠組みの中で、ローマ教皇庁内においても、シノドスの実施に関する対話が行われます。その成果は、各大陸のアセンブリーがもたらした成果と併せて検討されることで、諸教会による識別と、聖座の諸機関によるサービスとの間の、より深い統合を促進することになるでしょう。



シノドス実施への道

教会全体の
教会総会（エクレジアル・アセンブリー）

—2028 年 10 月—

振り返る
解釈する
方向づける
祝う

祝う

さて、最後の七つの災いの満ちた七つの鉢を持つ7人の天使がいたが、その中の1人が来てわたしに語りかけてこう言った。「ここへ来なさい。小羊の妻である花嫁を見せてあげよう」
この天使が、“霊”に満たされたわたしを大きな高い山に連れて行き
聖なる都エルサレムが神のもとを離れて、天から下って来るのを見せた都は神の栄光に輝いていた…
この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない
神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである
諸国の民は、都の光の中を歩き
地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る（黙示録 21・9-11, 23-24）

それぞれのアセンブリーが歩んできた道のりは、2028年10月の教会総会（エクレジアル・アセンブリー）においてその集大成を迎えます。この教会総会を通じて、教会全体は、シノドスの実施という道りで実を結んだ成果を認識し、祝い、そして未来へと引き継ぐよう招かれています。教会総会は、単なる到達点にとどまらず、これまで歩んできた旅路が一つに集約され、さらなる発展へと開かれ、教皇の責任のもと、教会全体の識別へと託される瞬間として形成されます。

教会総会の実施方法については、今後のステージにおいて、より具体的に定められることとなります。専用の『討議要綱』において、これまでの旅路を踏まえた上で、その内容と運営方法が提案される予定です。

このステージの特徴は、その祝祭的な次元にあります。とりわけ、典礼によって、「宣教するシノドス流の教会」となるとはどういうことかを明らかにすることが求められます。つまり、主によって集められ、みことばに耳を澄まし、交わりを生き、宣教に向けて自らを開くことができる民となることなのです。この祝祭的次元は、バチカンで行われる行事だけに限られるものではありません。各地方教会もまた、同様の祝祭や分かち合いの場を設けてこれに同伴し、祈りをもってこれを支え、そうすることで普遍的な交わりの一つの形を体験するよう招かれているのです。

さらに2028年の教会総会では、今回の歩みを通じて浮き彫りになったテーマの核心をより深く探求するため、意見交換の場が設けられます。そこでは、この旅路に参加した人びとや、特定の専門知識をもつ人びとで構成される「識別グループ」とともに、さまざまな視点（教会の立場、ジェンダー、世代、文化、社会的文脈）から資料を読み直すこととなります。各グループは、適切に再構成された、プロセス全体を活性化させる次の問いをもとに、それぞれの貢献を提示するよう求められます。

2021-2024年シノドスの閉幕後、歩み続けた旅路の成果として、

宣教するシノドス流の教会はどのような具体的な形を現し、

シノダリティはどういった新たな道筋を拓きつつあるのでしょうか。

こうして集められた提案は、今回の識別の歩みの成果として、教皇に提出されることになります。したがって、このステージにおいては、エウカリチアと識別が密接に結びついています。つまり、これまで歩んできた道はたまものとして理解され、喜びをもって分かち合われ、教会全体の責任へと託されます。それによって、教皇の導きのもと、教会はいのちを創造し続けるのです。